

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：都市間旅客交通需要変動の調査と分析	
日付： 6月 14日（日）、セッション時間：14：20～15：50	
オーガナイザー・司会者名（所属）：奥村 誠（東北大学）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：</p> <p>本大会では都市間旅客交通に関する企画セッションに対して、12 件の発表申し込みがあったため、内容的に幹線旅客純流動調査をはじめとする交通実態の調査とそれに基づく経年分析に関する 7 件の発表を本セッションに、ネットワークの評価と計画に関連する 5 件の発表を次のセッションに配置して、同一会場で連続して実施した。90 分の本セッションでは、7 件の発表を平均 11 分で行い、残り時間では各論文への質疑に当てたため、全体的な議論を行う時間はなかった。</p> <p>本セッションの発表を通じて、現在の幹線旅客純流動調査にはサービスレベル変数に関する項目が欠落している問題など、改善を期待する項目が多いものの、他のデータソースとの結合により多様な分析を行うためのベースとして使用されてきており、その重要性が再認識された。調査実務を担当する関係者への要望もいくつかなされた。</p>
	<p>（344） 竹林幹雄（神戸大学）：米国の航空市場に関する統計データは、詳細性、データ更新頻度の点で大変優れているという発表に対して、日本の全国幹線旅客純流動調査の意義に関する質問があった。純流動調査は米国のデータでもわからない乗継旅客の真の OD を捉えていること、わが国で航空との代替性が高い鉄道の利用も抑えているため代替性の分析ができることが利点であるが、そのためには料金のデータが不可欠であるという指摘がなされた。</p>
	<p>（345） 下原祥平（日本大学）：高速路線バスの時刻表データと純流動調査をマッチングさせた分析により、短距離区間で利用者の増加と増便が同時に起きているという発表があった。フロアから研究の適用先について質問があり、規制緩和の影響分析を志向したいという回答があった。休日の ETC 割引の影響を分析してほしいという要望があった。</p>
	<p>（346） 塚井誠人（広島大学）：1995 年、2000 年、2005 年の幹線旅客純流動調査におけるゾーン別のトリップ生成原単位をゾーン就業者数等で説明したが、十分な精度では説明できなかったという報告がなされた。これに対し、実務上は便益評価などとの関連を考えると、生成、発生段階の分析が重要であることから、あきらめずに分析を行うべきであるという意見が出された。</p>
	<p>（347） 磯野文暁（(株)三菱総合研究所）：交通機関別総流動量の月間変動パターンを用いて、純流動データの月別分解を試みた論文に対する報告がなされた。フロアから、この方法が年間拡大値を先に固定してその範囲で月別のシェアを動かしているのに対して、年間の拡大値に制約を設けないような方法が考えられないのか、という質問があった。</p>
	<p>（348） 栗田善吉（(財)運輸調査局）：国内の交通機関別月間旅客輸送量の時系列データを、他の社会経済変数データで回帰分析した結果が報告された。これに対して提供座席数や列車運行本数、航空運行回数などのサービスレベルは輸送量が多いことの結果である可能性があり、外生変数としては妥当でないという指摘がなされた。また運賃変数の扱いについて質問があった。</p>

(349) 奥田大樹 ((財) 鉄道総合技術研究所) : 在来線優等列車の座席予約システムの満空情報を乗車日 30 日前から取得し、各列車の満席率にたいして独立成分分析などを適用した結果が発表された。研究の目的を確認する質問に対して、各列車の指定席の構成比を時期によって変化させる施策に結び付けたいとの回答があった。また途中段階の満席情報によって、その前後の列車にどの程度需要が分散するのかなどの分析も可能ではないか、という提案がなされた。

(350) 柴田宗典 ((財) 鉄道総合技術研究所) : 鉄道優等列車旅客の自由席、指定席の選択行動に対して Web アンケート調査に基づく多指標多因子線形構造方程式モデルと、その得点を内包した 2 項ロジットモデルの作成結果が報告された。サンプル固有の態度変数を固定してシミュレーションすることの意義について質問があり、現在の OD パターンが成立する短期的政策の分析に使いたいという回答があった。

以上